

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	比較文明学 専攻
研究代表者 (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年 文学研究科比較文明学専攻 博士後期課程二年	氏名 丸山諒士	印
指導教員	所属・職名 立教大学文学部・教授	氏名 佐々木一也	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題	多様性の善さに関する一元的解釈と非一元的解釈——ライプニッツ哲学を手掛かりに		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年 文学研究科比較文明学専攻 博士後期課程二年	氏名 丸山諒士	
研究期間	2017 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 182,030円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の背景は現代様々な分野に価値あるものとして登場する「多様性」について、その価値・善さを根底から問い直すことである。この課題のために筆者はライプニッツの哲学を手掛かりとした。彼はかの「最善世界説」において、無限に多様だが秩序だった世界を最善な世界として神が選んだと主張している。このことは、多様性それ自体の善さを哲学的問題として取り上げている点で特徴的である。そこで本研究は先の課題の一助として、彼がどんな世界を善き秩序と規定しているか、また何故それが善であるとされるか、を明らかにすることを目的とした。その際、彼の主張の神学的ドグマへの依存を批判的に解釈することが、本研究の独自性である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 多様性 } { 一と多 } { ライプニッツ }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の成果は大きく分けて二つある。一つは、ライプニッツが多様からなる最善世界の秩序をどのように規定しているのかに関わり、もう一つは神による最善決定という前提が彼の哲学(とりわけ様相論)において持つ機能に関わるものである。前者は本研究の主題の一つである「多様性」をライプニッツがどのように捉えていたのかを明らかにする。後者は、多様性やその善さの内容の解明には関わらないが、それらを前提にすることで発生するライプニッツ哲学に内在する問題への考察を通して、間接的に本研究に資する。また結論から言うと本研究が掲げた最大の問い「ライプニッツ哲学においては何故多様から成る秩序立った世界こそが最善であるのか」に明確な答えを与えることはできなかった。しかしこの失敗の原因と改善策は、上記二つの成果から得られた。

以下、二つの成果を順々に記す。最後にこれらの成果を踏まえて、上手く答えることのできなかった本研究の問いの改善を提示する。

1. 多様からなる世界秩序のあり方、その善さのあり方

本項は(様式 3)の 2「ライプニッツにおける神の仕事の表現法について」の内容に該当するため、その要綱をもってこれに代える。

ライプニッツ哲学においてどのような世界が最善なのかを考える時、叡智的被造物の幸福を最大化させる世界、本質の量を最大化させる世界、最も単純な法則を伴いながら最も豊かな多様性を持つ世界、という概ね三つの候補が上がるのが指摘される。筆者は P. ラトーの研究(Leibniz et le meilleur des mondes possibles (2015))を引用しながら、基本的には三つ目が最も重要であると考えた。何故なら、能力に限りを持たない神にとって「最大化」に限度はなく、従って何かの最大化を神が行うことは不合理であるからだ。これら二つの最大化は無制約な量的最大化ではなく、最も単純な法則を持ちつつ最大の多様性を持つという制約下での最大化であらねばならない。ラトーはこうして求められる最善世界の様態を「最適(optimus、善いの最上級で最善とも訳せる)な形」と呼んだ。それは「最適」という言い方からして明らかであるが、合目的性を有し、その意味において質的である。従って神が世界創造に際して持つ目的が、多様性の善さの説明に通ずる。しかしこれは人間に知られるところではない。それでもライプニッツは、神の知恵を不十分にしか言表できないと断った上で、比喩を用いてこれを表現している。彼は実に様々な比喩を用いるのだが、筆者はそれらを神の世界創造や創造された世界(つまり「仕事」)のどんな特徴を表現しているのかに応じて三種類に分けた。

三つとは芸術的比喩、幾何学的比喩、エコノミーの比喩である。それぞれについてここで詳述することはできないので極簡略して説明する。芸術的比喩は「悪が混じっていてもこの世界が最善であるのは、部分に陰影があっても絵画全体は美しいようなものだ」というように使われる。この比喩は最善世界が善悪入り混じった多様からなる調和であることを上手く説明してくれるが、他方最も単純な法則性を持つことを表現することは不得手である。幾何学的比喩は「神がどんな世界でも創造できるのにこの世界だけを最善として創造するのは、二点間を結ぶ線はどんな線でもよいのに最適な線は直線であるようなものだ」というように使われる。この比喩は最善世界の選択が幾何学の作図のように数学的厳密性をもって唯一に決まることを教えてくれる。つまり最善世界の法則性を上手く表現できる。しかし他方で直線の価値的な善さを上手く表現できない。エコノミーの比喩の代表的なものは建築の比喩で、これは「神はこの世界を、優秀な建築家が使用用途や予算、立地、外観や住心地に鑑みて最良の家を建てるように、創造する」というように使われる。この比喩は、最善世界の合目的性だけでなく、芸術的比喩が上手く表現していた調和性や、予算との兼ね合いという点では幾何学的比喩の法則的決定性をも表現できる。そういう意味でエコノミーの比喩は、ほか二つの比喩の特徴を併せ持ったものと言える。しかしながら神は建築家のように、雇用主の意向や予算、立地といった外的な制約を基本的には受けない。従って、我々が普通に考えるような経済性(費用対効果)をそのまま神の世界創造に適用することはできない(なおエコノミーは古代ギリシャより伝統的に神の摂理や世界の運営として用いられる語である)。またエコノミーの比喩において折衷されているとはいえ、幾何学的な決定と芸術家の創造は排他的な関係にあるようにも思える。

以上のことから、我々には矛盾に思えてしまうような神の「驚異的エコノミー」を、ライプニッツは複数の比喩を組み合わせることで、なんとか肉迫しているのだと、結論付けた。最後に比喩表現の解釈には二つの立場があることを示しておこう。一つは、比喩ではあるけれども神の仕事の何かを表現しているとして積極的に捉え、人間知の神への接近を肯定するものである。もう一つは比喩でしかない以上欠落を有した表現だとして消極的に捉え、人間知の神への接近を否定するものである。

2. ライプニッツの様相論と最善世界説の関係

研究成果の概要 つづき

本項は(様式3)の1「可能な世界による偶然、世界の無限による偶然-ライプニッツの偶然性再考-」の内容に該当する。本論の題名には多様性や最善性といった言葉はないが、最善世界説が彼の様相論を考える上で果たしている重要な役割がここでは指摘される。

一般的にライプニッツの様相論は、可能世界という概念に依拠したものであると理解され、その場合は現代の様相論理学に多大な影響を与えた可能世界意味論の祖のように扱われる。しかしライプニッツの様相論はそれだけではなく、所与の真理命題の分析に依拠したものもあることを、本論において筆者は強調した。可能世界に依拠した様相論(以下「可能世界説」)では、全ての可能世界において真である命題は必然的真理であり、この世界において真であるが少なくとも一つの可能世界において偽であるような命題は偶然的真理であるとされる。他方、分析に依拠した様相論(無限分析説)では、命題分析が有限回数ステップで終わり主語と述語の同一性や主語による述語の内包が証明可能であるものは必然的真理であり、分析が無限に続き終わりがなく、従って証明不可能であるものは偶然的真理であるとされる。紙面の都合上根拠を省かざるを得ないが、二つの様相論が互いを排斥しないが必要ともしないという独立性を有することが重要である。この事実が我々に直面させるのは、ライプニッツ哲学においてある出来事の偶然性は二つの様相論によって二重に規定されるということである(本来必然性もまた二重規定を受けるはずだが、それについては今回は触れなかった)。

この二重規定は注目されることもなければ、ほとんど気付かれることさえない。これは神による最善世界の選択という大前提があればこの二重性は生じないように思われ、しかも普通この前提を抜きにライプニッツ哲学を解釈することは為されないからである。最善選択を前提した場合、無限分析説において分析が終わらない偶然的真理は、分析系列外にある神の選択にその理由を求めることができる(この構造は一般に言う宇宙論的証明を提供する)。こうすれば、無限分析説の議論を可能世界説へと接続できる。しかしこの解消方法には、一つの問題がある。ライプニッツは分析に終わりがないうえに証明不可能な偶然的真理が成立する根拠を、加算に終わりがないうえにかかわらず極限としての解を持つ収束無限級数の成立とのアナロジーに求めている。そして、収束無限級数の成立は左辺を普遍的に支配する法則の存在に由来しているため、任意の偶然的真理がこれとのアナロジーで成立するためには、偶然的真理を成り立たせる全ての諸事物(結局は全宇宙)が普遍的法則に支配されている必要がある。だが我々は確かに収束無限級数の左辺の法則性を熟知しているが、他方で全宇宙を支配する法則については完全には知らない——おそらくは知り得ない。それは我々が可能世界説において想定する神の最善選択の理由を知らないことが一因である。従って上記の偶然性の二重規定の解消が達成されるためには、我々人間の知が神の選択理由を含めた全宇宙に関する知と何らかの仕方で結び付いている必要がある。これは「人間は神の似姿」という伝統的ドグマを直截に受容する場合には肯定できる。しかし他方で、分析が無限に続くことを深刻に捉える場合、いかにしてもその全体に関する知を得ることは(我々の無能力の故にではなく)原理的に不可能であるように思える(だからこそライプニッツはアナロジーを用いたのではなかったか)。ここから偶然性の二重規定を残存させるという選択も出てくる。但しこのことはライプニッツの哲学体系に致命的な欠陥をもたらすわけではない。むしろ「慢心を避けるためには神の選択理由について無知でなければならない」と述べるライプニッツの慎重な姿勢には合致するだろう。

3. 多様性の善さに関する一元的／非一元的解釈から神学的／非神学的解釈へ

本研究は計画当初、多様性の善さに関して一元的解釈と非一元的解釈を試みようとしていた。一元的解釈とは、世界がどれだけ多様であっても究極的には神の善性にその善さを一元的に還元して解釈するというものである。これは大雑把ではあるもののライプニッツの意図に親しい。だがこの場合、何故それが善いのか不明であるため、敢えてこの還元を行わない解釈を——単に一元的ではないという形式的理由で——非一元的解釈と呼んだ。

しかし上2項の成果を含めた研究途上において、一元的還元そのものよりも、そもそも還元される世界の多様性やその秩序、還元される先の神の知性や選択理由、還元の有在方などが、専ら比喩やアナロジーによって表現されているという事実の方に目が向いた。それは読者の理解を補助するサービスとしての単なる飾りではなく、有限者による無限者の記述に伴う避け難い方法なのではないかと——後にして思えば当たり前の事実であるが——考えた。すると、古代より神の世界に対する関わり方としてエコノミーとの比喩による表現が定着していることも判明した。そこで筆者は、この比喩やアナロジーによる不完全な最善世界に関わる描写(あるいはこれを含むライプニッツの哲学全体)の解釈として、神学的解釈と非神学的解釈を行うというように方針変更を決めた。これら解釈の差異は、神の存在の有無の問題ではなく、教義学的な言説を受容するかしないかの差異である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表と研究ノートの寄稿

1. 丸山諒士、「可能な世界による偶然、世界の無限による偶然-ライプニッツの偶然性再考-」、日本ライプニッツ協会・第九大会、2017年11月18日於学習院大学目白キャンパス
2. 丸山諒士、「ライプニッツにおける神の仕事の表現法について」『境界を超えて——比較文明学の現在』18号、2018、91-104